ギリシアの内戦 (1946—49)

——その 2——

勝　部　　元

4. 中間期 (1945—46)

ギリシア共産党は44年の12月事件で明白な敗北をこおむった。革命の機はまったく熟していたのに，シアントス (Siantos)，パルツァリデス (Partsalides)，ネフェロウディス (Nefeloudis)，スクラヴァイナス (Sklavainas) らによって構成された指導部の誤った方針と指導によって，それは挫折した。そしてその結果は，革命の武装解除を実質的内容とするヴァルキーザ (Varkiza) 協定の調印だった。占領下の抵抗運動と12月事件におけるこのシアントスらの誤りについて1950年にザハリアディスは「わが人民が，ドイツ占領軍と断固たる斗争を遂行したという事実にもかかわらず勝利を達成する事に失敗した。それは第三回協議会でのべられているように，わが党の指導部が主として誤った方針をとり，斗争をイギリス帝国主義の目的に従属させ，降伏の方針，有名なバルキーザ協定以後は武器を引き渡す方針をとったためである」とのべている[1]。また1964年11月の「ギリシア内戦の若干の教訓」[2] にも同様につぎのようにのべられている。「ギリシア共産党指導部は，ヒトラー・ドイツにたいする連合国軍の斗争を成功させるために全力をあげてただしく行動した。しかし指導部は，イギリス帝国主義者の陰謀を暴露せず，抵抗せず，かれらの干渉にたいする斗争へと人民をたかめていくことをせず，国の民主的発展のためにたたかう人民の意思と決意をもりあげることもしなかった。

ギリシア共産党指導部がおこなった再三の譲歩と誤りは，帝国主義者の干渉の結果，戦後，国の権力が外国人に屈従している財閥寡頭支配制の手にうつるのをたすけた。外国の帝国主義的支配がまたもや人民におしつけられ，ギリシア人民の斗争にとって余計な重大な困難が生じた。」[2]

ヴァルキーザ協定の受諾に反対したゴチゴチの小グループの人々とともに山岳地域に留ったアリス・ヴェロウチオティス (Aris Velouchiotis)[3] は45年4月の第11回中央委総会で非難された。

1) N. Zachariadis; People of Greece will Achieve Victory (For A Lasting Peace, For A Peoples Democracy, 8 Dec. 1950)
2) 「平和と社会主義の諸問題」日本版，1964年11月，p. 20.
3) この11回プレナムのすぐあとでアリス・ヴァロウチィオティスの隠れ家は通報され，かれは政府軍により射殺された。

12月事件，あるいは12月革命の敗北[4] とヴァルキーザ協定の調印後，力関係は明らかに反革命に有利に変化し始めた。

4) シァントスは強力な ELAS 軍団をアテネの斗争に参加させる代りにサラフィスとヴェロチオティスに命じて北部のエピルスにあるセルバスの孤立した勢力を攻撃させた。その理由はチトーの北下を恐れてのことであったといわれる。
(G. Kousoulas; Revolution and Defeat p. 211)

左翼の解体と右翼の結集がこれであった。EAM 政治委員会 (PEEA) のもと指導者たちスヴォロス (Svolos)，ツィリモコス (Tsirimokos)，アスコウツィス (Askoutsis)，ストラティス (Stratis) らは，1945年4月18日，新人民民主同盟＝ギリシァ社会党 (ELD/SKE) を創立した。労働戦線では「下からのみの統一戦線」つまり古い，赤色労組主義にもとづいて，労働総同盟とは別個に労働者反ファシスト連盟 (ERGAS) が結成された。

これに反し，反革命勢力は急速に結集しつつあった。かれらの行動は王制支持というスローガンの下に統一された。情勢の掌握者であったイギリス帝国主義はその主要な支持を摂政・アテネの大主教ダマスキノス (Damaskinos) におき，またか

れらは共和派自由主義者グループにも望をかけていた。しかしかれらは情勢を正確に掌握していたとはいえない。

戦災より経済的復興，悪性インフレとの斗争—これが中心的経済的国民的課題だった。国民的政治的課題はまさに制憲問題だった。制憲問題つまり亡命のゲオルグ王を復へきさせるかどうか，は君主制か共和制かという単純な政体問題ではなく，反革命か革命かという階級斗争の中心課題となっていた。ゲオルゲ・コウソウラスはかいている。「しかし多くの普通の市民の胸の中ではこれは決して共和制か君主制かという政府問題のコンテストではなかった。かれらにとってこれは君主国家か共産国家かをめぐる斗争であった。筆者はこの激動の時期をギリシアですごしたが非常に多くの人々の中で，伝統的に共和派に賛成の人々の中でさえ，共和制への二者択一でなく，共産主義者の排戦にたいする保証として王制賛成への態度変化がみとめられたということは真実だったといえるだろう」[5]。

5) Kousoulas; Revolution and Defeat London Oxford University Press P.221.

1945年1月1日パパレドレウ政府は辞任し，反ソ主義者プラスティラス将軍 (Plastiras) が新内閣を組織した。プラスティラス政府はヴァルキーザ協定の履行に努力したのち，45年4月6日狂信的王制ファシスト・ヴルガリス (Vulgaris) 政府に席をゆずる。

1945年5月30日，このような複雑な情勢下のアテネのエロオイジス空港に，ニコス・ザハリアディス (Nikos Zachariades) が帰ってきた。この男が爾来1956年第6回拡大中委総会までギリシア共産党の最高指導権を握る。かれは1936年9月13日逮捕投獄されていたが約1カ月前にダッハウ強制収容所から連合国軍により釈放されたばかりであった。

1945年4月5日～10日のギリシア共産党中央委員会第11回総会にひきつづき，ザハリアディスの帰国後45年6月25日～27日に第12回総会がひらかれた。ザハリアディスを先頭とする新指導部[7] はこの情勢をどのように分析し，どのような方針を対置したか。

ザハリアディスはいう。「ヴァルキーザ以後の時期におけるギリシア共産党の戦略は何でかったか。それはその目標を『時をかせぎ，敵を浸食し，力を結集し，ついで攻撃にうつる(スターリン)』戦略であった。それは退却をよそおいながら主力と予備を保持し，再編成し，新な攻撃にうつる戦略だった。」[8]

7) 12回総会で選出された新指導部はつぎの人々から構成されていた。シァントス，イオアンデス，ペルタライデス，カライオギス，ゼヴゴス，アリス・ヴェロウチオティス。
8) V. Kousoulas ibid., p. 221.

さらにこの12回総会では当面する革命の性格規定がかわった。すなわちブルジョア民主主義革命の段階から，社会主義革命段階への移行である。「来るべき革命は社会主義的性格のものであろう。しかも同時に，外国の支配，土地その他のようになお残存するブルジョア民主主義的諸課題を解決するものであろう。」[9]（しかしこの戦略転換は大きな誤りであったとギリシア共産党はのちに自己批判する[10]）。

9) Kousoulas ibid., p. 223.
10) 「ギリシア共産党の当時の指導部がとった矛盾にみちた極左方針についていう場合，党指導部の実践活動が反帝的民主主義の段階をへない社会主義革命への志向につらぬかれていた事実を指摘しなければならない」(前掲「ギリシア内戦の若干の教訓」日本版，24ページ)

反動的政府の行うキプロス，ドデカネス，北エピロスの領有，反アルバニア・キャンペーンといった膨張主義的外交政策と大衆の間の民族主義的気分にたいし，かれらはジレンマにおちいり，無原則的な譲歩を行う。すなわち，反革命の側の北エピロス併合要求にたいし，1945年6月1日政治局は声明する。「民主主義者の大多数がギリシア軍隊による北エピロスの即時軍事占領を決定するなら，ギリシア共産党はそれに反対の意志を表明するが，行動には同調するであろう」(のちに1950年にザハリアディスはこの声明は「恐るべき誤りであり，第一次占領時代の民族主義的遺産である」と自己批判している)。

しかしより大きな問題はギリシアの政治情勢における最大の要因たる英軍の評価にあった。12回総会の党声明はこの要因をはっきり指摘している。「ギリシアはイギリス帝国のもっとも重要な交通動脈の一つの上のもっとも重要な戦略的要点であ

る。英帝国の存在する限り，この動脈は存続し，それを保持するためイギリスは可能なすべてのことをするだろう。現実主義的な外交政策を行なうにあたってこの事実を無視することは許されない——正しい(ギリシア)の対外政策は，つぎの二つの極の間を動くことである。すなわち，ソ連を先頭とするヨーロッパ・バルカン基軸とイギリスを先頭とする地中海基軸がこれにあたる」[11]。

11) Kousoulas ibid., p. 223.

さらにこれに英・ソ関係がつけ加わる。1944年10月のスターリン・チャーチル覚書及び43年2月のヤルタ会談で，スターリンはギリシアがイギリスの勢力圏であることを無条件的にみとめていた。ユーゴでも，中国でも，その他いたるところで第二次大戦中および直後の革命情勢期にみられ，またその悪しき伝承として，現在のソ連の対外政策にもみられる最悪の現実主義，プロレタリア国際主義と真正面より背反する大国民族主義がここでもギリシア革命のその後の発展にとって大きな障害となる。事実スターリンと「社会主義の祖国」ソ連はその後のギリシア革命の発展を援助しなかったし，それどころか停止させようと力をつくした。のちにギリシアが内戦状態になったあとのスターリンの態度について，1948年2月10日の会談のもようをジラスはこう書いている。「それから，スターリンはギリシア内乱に言及した。『ギリシアの反乱は，そろそろ店をたたまなくちゃ。……』そしてカルデリにむかい，『君は本気に信じているかね，ギリシア反乱の成功を？』といった。『もし外国の干渉さえ強くならなければ，もし重大な政治的，軍事的な誤りさえなければ』。スターリンは，カルデリの意見に鼻もひっかけないで，なおもしゃべりつづけた。『もしも，もしも，だと！いや，成功の見通しはまったくない。大英帝国とアメリカ合衆国が—アメリカ合衆国は，世界最大の強国なんだぞ—地中海の交通網を，そうやすやすと破れるがままにしておくと思うかね？　とんでもない。しかも，われわれは海軍力がないのだ。ギリシアの内乱は，中止しなくちゃいかん。それもなるべく早くに，だ』」[12]

12) 「スターリンとの対話」ミロバン・ジラス著，新庄哲夫訳，p. 264～ .

したがってスターリニスト・ザハリアディスは，このようなスターリンの意に反した武装蜂起の道をすすんだことになる。（もっともかれはスターリンの意志を知らずにか，あるいは一説によるとスターリンは45，6年には蜂起にひそかに賛成していたともいわれているが），12回総会直後の7月5日の政治局声明よりはじまって，ギリシア共産党はしつこく，英軍撤退を要求しはじめた。ザハリアディスは12月8日の論文で「一カ年にわたるイギリス軍の駐留は国の復興の唯一の障害になっている。……現在の第一の民族的要求はイギリス帰れだ」(Rizopastis 1945年12月8日号 Kousoulas ibid p. 228) とのべるにいたった。45年7月8日のチトーの演説でも，ポツダム会談でも，英軍のギリシァ駐屯問題はとりあげられ，ソ連政府は9月12日に，ギリシア問題の覚え書を手交した。このとき，ギリシア反動とイギリス帝国主義は戦術をかえた。1945年11月25日，王政ファッショと呼び声高いヴルガリスの代りに自由党の指導者ソフウリス (Sophulis) を首班にすえたのである。しかし内閣は変ったが政治テロルはひきつづき行なわれ，もと ELAS のメンバーは罪人とされ逮捕されつづけていた。イギリス軍は自らに代りうるギリシア軍の偏成に全力をつくした。1945年2月，ヴァルキーザ協定のさいギリシア軍は第Ⅲ山岳旅団，秘密大隊，自衛隊部隊より構成され約3万人にすぎなかったが，6カ月後にはイギリスの援助で第Ⅲ旅団は第Ⅱ師団に，また秘密大隊の士官をスタッフとする第Ⅸ，第Ⅺ師団がつくられ，兵力も7.5万人に膨張していた。

社会主義の序曲としての人民民主主義革命をめざすギリシア共産党は，その基本的目標を武装斗争においていた。かれらは，ヴァルキーザ協定にしたがって武器を引きわたすとき，古い役にたたないイタリア製のそれを引きわたしただけで，大部分の新鋭の武器は隠匿していた。1945年10月初旬の第7回大会で，デミトリオス・パルツアリデス (Partsalides) が「平和的移行」についてふれたとき，ザハリアデスはこれを例外として，若干の同志諸君の「平和移行についてのべるときの一面的なもののとりあげ方の傾向」を批判した。

ギリシア共産党はすでに48年1月15日マルコス・ヴィフリアデスのいうように「(1)人民の経済要

求のために斗う大衆活動の強化　(2)動揺分子を追いはらい武器を確保することで ELAS の予備軍を発展させることに注意を集中する。すべての EAM のメンバーは一人の人のように ELAS を助け，すべての軍需品を必要カ所へ輸送する　(3)軍事スタッフをもった強力な精密な非合法軍事機関をつくり上げる」(Kousoulas ibid., p. 225) ことに全力をつくしていた。しかも当時のギリシア共産党の党風はまったく非民主主義的権威主義的だった。1946年に離党したヤンス・ペツオポウロはこの点をつぎのようにかいている。「中央委員会は単に討論の課題を提案するだけでなく，会議の議事日程をまえもって最後的に決定していた。代議員の数やその選出方法でさえ地方機関でなく中央委員会が決定する。秘密投票という文句なく民主的制度は党規約では樹立されず，投票方法も中央委員会によって決定されていた。さいごに大会は中央委員会の記録をチェックすることなく，報告をさいて受理するだけだった」[13]。

ギリシア共産党の指導下の ERGAS はやがて総同盟に大きな影響力をもつようになり，書記長には共産党員パパリガス (Paparigas) がなった。かれらは強力なスト活動を行った。政府はささいな手つづき上の欠かんを理由にこの執行部をみとめず反動的な臨時執行部をつくって対抗した。

13) Kousoulas; ibid., p. 228.

1946年に入ると情勢はますます尖鋭化してきた。46年初め ERGAS 指導下に無実の民主的市民の処刑反対のストがアテネその他の都市でまきおこった。1月21日にはギリシア共産党中央委員会は，ギリシア情勢の主要な責任者として英軍を非難し，即時英軍撤退を要求した。英帝国主義とギリシアの反革命は，46年3月に予定された国会選挙にかけていた。これに反しギリシア共産党はヴァルキーザ協定締結一周年記念日にあたる第2回中央委員会総会で「国内情勢とバルカンおよび国防情勢を考慮した上で，王制ファシスト勢力にたいして新しい武装蜂起を組織する」ことを決定する。この決定はすぐさま実行にうつされた。1946年3月30〜31日，テッサリーの村落リトコホロン (Lĭto-khoron) で共産党のゲリラの一群が武装攻撃を開始したのである。これは総選挙の前夜にあたった。そしてかれらは当然総選挙のボイコットに出た。この棄権戦術はすでに45年6月16日に決定されていたものであるが (「公共の意志の自由な表現の条件が確保されていないときは，ギリシア共産党は他の民主的(共和派)諸勢力とはかった上，選挙の棄権を考慮している」) のちの経過からみるとこのボイコット戦術は大きな誤であった。この点について「ギリシア内戦の若干の教訓」はいう「だが，この危機的瞬間に，党指導部は，平和的，民主的発展をめざす斗争で党についてきた大衆は，武装斗争にすすんだ場合でも，自動的に，十分な全面的な準備がなくても，われわれについてくるだろうとなんの根拠もないのに推測して，選挙のボイコットを決定し，党を武装斗争にむかわせ，イギリス帝国主義者とギリシアの反動がおこした内戦に，しかもすでにのべたように，そのための機が熟しておらず，有利でない条件のもとで突入していった。」[14]

選挙の結果，人民党(王党派) 191，全国政治同盟 56，自由党(共和派) 742，EDES 17，その他 11，棄権僅か 9.4％という結果であった。王政復辟が決定し，46年9月27日国王ゲオルギII世が帰国する。とまれ，サイは投げられた。共産党は十分な軍備と大衆の支持なしに内戦に突入したのである。

14) 「平和と社会主義の諸問題」日本版，1964年11月，p. 23.

5.　内戦 第1期 46. 3—47春

ギリシアの内戦は前述のように46年3月30日深夜ゲリラ部隊によるオリンパス山東山麓のリオフォロン村攻撃をもって開始された。これは1950年第3回協議会でのディミトリオス・ヴランタスの報告によれば「革命の開始」であった。ところでギリシア内戦の特徴は，これらのゲリラ活動が「訴追された民主的市民」の一群の防衛的活動の形態ですすめられ，ゲリラ戦が正規戦へ移行する47年11月迄ギリシア共産党が都市部で合法活動を行なうことができたという点にある。

ところで1946年にはどのような想定の下にザハリアディスとギリシア共産党は武装ゲリラ斗争をはじめたのであろうか。ザハリアディスはいう。「1946年の情勢は如何であったか。第一に国内的にみて全員意見の不一致はなかった。われわれは

すべて情勢は熟しており，武器をとって斗うべきだという点で一致した。しかしわれわれはまた対外的要因を検討する必要があった。いかなる背後よりの支援をわれわれはもっていたか。われわれの背後には人民民主主義諸国があった。しかしわれわれはイギリス占領下において斗争を開始せねばならなかった。したがってわれわれはイギリス軍の即時の干渉をひきおこしてはならない，という事実を考慮せねばならなかった。われわれの政策は反動の仮面をはぎとり，イギリスの政策の仮面をはぐために表面上は防衛的でなければならなかった。この方面におけるわれわれの努力はイギリスを孤立化させ，その即時の軍事干渉をさける一方，国内の反動に対する攻撃を開始するため人民民主主義諸国に依存する，というものであった。」[15]

15) Kousoulas ibid., p. 236.

みられるようにギリシア共産党が1946年に「国内的に情勢は熟した」と判定する背後には (1)北部の人民民主主義諸国とくにユーゴ，アルバニア，ブルガリアの支持，(2)イギリス軍の介入をうまく防止しうる，という想定があったのである。またこの武装ゲリラ斗争の開始はユーゴのチトーのプロモーションによるものといわれ，事実1945年3月，ザハリアディスがプラーグでの共産党の会合ののち，ギリシア帰国の途次ユーゴに立ちよったさい，そこでチトーの「全面的支持」をとりつけた，といわれている[16]。

かれらの想定では国内的視点のみからいうならば，1) 共産党以外の諸政党が制憲問題でするどく分裂し，また極右勢力への反発から中間派が共産党に同調し始めていた。2) 経済が極度の混乱状態にあった。3) 文官層の間に共産党はかなり浸入しており，またかれらは低賃金に悩んでいた。4) 軍隊もまた共産党員の浸入のため弱体化していた，というような有利な情勢があった。またギリシア共産党はさきにのべたように1947年11月まで合法性と宣伝の自由をもっており，また山岳地帯には戦時下の抵抗斗争中に獲得した優秀な武器と要員(約3000人)をもっていた。しかしこのような条件だけで「情勢が熟した」と判定したことが如何に誤りであったかはのちに判明する。

16) 1949〜10. 9, 第3回大会でのバルツオタスの報告, Kousoulas ibid., p. 237.

北部にはじまった武装ゲリラ斗争は古典的な「ヒット・エンド・ラン」スタイルの作戦を行なった。すなわち「ゲリラの戦術は単純かつ効果的だった。つまり目標の選定，軍事力の結集，憲兵哨所にたいする夜間の奇襲，若い村民の自由意志的または強制的募集，食料の略奪，ついで山岳地域の隠家への撤退」(Kousoulas, 前掲書 p. 239) である。戦時中からの民間人の「自衛組織」が有効に協力した。

こうして武装ゲリラ斗争発展の第一段階 (1946年3〜9月) がはじまった。この段階では7人〜10人の武装した一団が古い型の武器をもち，ほんの僅かの補給をうけながら，迅速に行動し，攻撃作戦の直前にだけ，勢力を結集する。政府側の経験不足の憲兵は，この初段階で有効にこれらの小武装ゲリラと斗うことができない。

ギリシア共産党は都市にあって，ゲリラ活動支援の有効な宣伝活動を行なうことができた。1946年8月には政治局はザハリアディスの命令でELASのリーダーの一人だったマルコス・ヴァフィアディス (Markas Vafiades) をゲリラ斗争の調整のため山岳地帯へ派遣した。

1946年8月には北部のいくつかの村落がゲリラに襲われ，破壊された。憲兵に代ってギリシア正規軍が弾圧の仕事をひきうけるようになった。しかし1946年末には9万人に達したギリシア政府軍も，そのうち4万人は補助部隊で共産党員に滲透され，政府にとってあまりたよりにならなかった。

ギリシア軍及びその英軍の助言者たちは経験不足のため，きわめてまちがった「静止的防衛」，「時限掃討作戦」を行ったので，自由に出没し，奇襲をかけ，退却し，軍隊がひきかえすとすぐまた襲ってくるゲリラ隊に，とうていたちうちできなかった。

アーサー・キャンベルはかいている。「この期間のゲリラたちの戦術は，つぎの原則にもとづいていた。攻撃地点では戦力の優位を保つこと。そして増援部隊の到着ルートをすべて断つことで，戦斗期間中ずっと，この優位を確保すること，どの場合においても，攻撃は迅速にし，それに劣らぬ迅速さで，国内ないし国外の，用意の根拠地に

撤退することなどである。軽装であり，土地にかんしては撤底的な知識をもっていたことで，ゲリラは，ギリシア政府軍の追跡部隊を容易に引きはなしてしまうことができた。

軍事活動と併行して，共産主義者たちは，強烈な地下活動も巧みに行なっていた。兵員募集者・補給者・スパイ・通報者のネットワークを広範囲にわたって組織していた。この方法や，少々妥当でない名前だが『自衛』という名称の下に，彼らは多くの地域，とりわけ山岳地帯に，統制力を発揮していた。「イペフラノス」——文字どおりの意味では「責任ある者」の意——が，各村におけるEAM支所として設けられ，共産主義的原則への服従を強要し，ゲリラが必要とする奉仕を要求した。これを拒む者は射殺されるか追放された。テロと宣伝をつきまぜながら，この市民組織は，EAMとELASにたいする人民の支持を獲得した。

ギリシア国防軍（GNA）は，この種の戦斗方式に対しては準備が拙劣だった。ゲリラより数の上では優勢だったが，なにしろ1945年に募兵した新兵どもであり，ほとんどろくな訓練もうけておらず，経験を積んだ指導者も極めて少数という状態だったのに，かれらは直ちにゲリラ相手の作戦活動にまきこまれたのである。これにつけこみ共産主義者たちは低い階級の者の間に浸透したから，戦斗中に戦友にたいして歯むかう者や，上官を殺す者がでた。政府軍部隊は町のような静的な地点ないし通信の中心地で部隊を展開したために，いや応なしに防禦体制に追いこまれ，他方，護送は輸送隊の活動も，ますます多数の護衛兵を必要とするようになった。政治が軍人の足手まといになり，自分の選挙区の安全しか考えない閣僚どもの命令で，軍人は，あまりにしばしば地位を決められてしまうのだった。」[17]

17) Arthur Campbell; Guerillas, A History and Analysis 1967, アーサー・キャンベル著，沢木静訳「ゲリラ」富山房，174～175ページ。

同様にのちに，ゲリラ討伐の総司令官となるパパゴス元帥はかいている。「かれらの戦術はつぎのような原則にもとづいていた (1)共産主義者は哨所または村落を攻撃することを決定した時には，まずその武装力が自分達のそれよりも比較的劣勢である事をたしかめる。そしてこのようにして自己の目的を迅速確実，ほとんど損害なしに達成する (2)目標がより大きな場合には，追加な兵力を充分によび集め，敵の援軍の到着するルートをすべて遮断する。しかし可能な場合はかれらは孤立した哨所をえらぶ。あらかじめ定められた時間内に作戦が成功裡に完了しない場合はこの作戦を放棄する (3)目的は捕獲占領または一定地域をかためる事にあるのではなく，迅速な襲撃を行ない地域的な成果をあげ，ついで急速に遠隔の地にある根拠地——国境に近接しておりそれが許される場合は外国領土内にあることがのぞましい——に撤退する。この活動と平行してまたそれに助けられて共産党の指導者たちは強力な地下活動を行なう。この目的はゲリラ活動を支持するために，スパイ，情報者，供給者，募兵係の網の目を組織する事にあった。この組織は「自衛団組織」という誤った名がつけられていたが主として山岳地帯における広い地域に眼にみえない支配を行う事になった。しかもこの地域をゲリラ・グループは公然とは占領する事はできなかった。テロリズムやプロパガンダによってこの眼に見えない行政機構はこの地域の村落のかなり多数の住民から，こう納，協力を受け少くとも抵抗を受ける事はなかった。それに反対する村民は殺害されるか，もしくは家庭を捨てて都市に避難する事をよぎなくされた。」[18]

18) Alexander Papagos; Guerrilla Warfare, Foreign Affairs Jan. 1952, p. 221.

マルコスが山岳地帯へ到達するやゲリラ活動は強化された。46年9月にはゲリラはテッサリーとマセドニア国境のデスカティ（Dheskati）村落を急襲してひきあげた。

この分遣隊はライフル，自動小銃，機関銃，小規模の軍需物資の補給をうけていた。各地区の分遣隊は，諜報，補給，情報の任にあたっている各地方の「自衛」組織の管理下にあった。この段階の終りまでには多くの山岳地帯に地方司令部が組織された。

1946年10月26日に個々のゲリラ隊はギリシア民主軍（DSE）を組織する。総司令官マルコスの下にペロポネス，ロウメリ，エピルス，テッサリー，マセドニア中・西部，同東部，タラス西部に地方

司令部が組織されるにいたり，ゲリラ斗争はますます拡大してゆく。こうしてパパゴスのいうように「1946年の終りにかけて，情勢は危機的であった。共産主義にたいする民族的斗争は互解しかけていた」のである[19]。

19) Papagos ibid., p. 222.

1947年1月24日，ツアルダリス政府に代ってマキシモス (Maximos) 連立政府が組織された。この政府の下で英軍指導下に，広汎な掃討作戦が計画される。

これは南から北へしだいに掃討をすすめる，というものであり，パパゴスによるとつぎのように計画されていた。すなわち「この掃討作戦は，さいしょの時期には選定された地区の狭撃作戦として計画された。狭撃個所をしだいに中心部にしぼっていくというやり方である。このようにして多数のゲリラ隊員をとらえ，ついで戦斗し，せんめつせざるをえなくさせる，と期待されていた。つぎの時期には——これは非常に短期とみられていたが——残存ゲリラを掃討することになっていた。」

同時に軍隊よりの共産主義者の追放がすすめられた。

しかしこの作戦も効をそうさなかった。共産ゲリラ隊は，政府軍の攻撃の情報をいち早くキャッチして，近接の未掃討地区へ逃れた。他地区へ移動しない場合でも，うまく狭撃をのがれた。

掃討に成功した場合でも，さいしょに想定されたよりもはるかに尨大な兵力と犠牲を必要としたその地域の住民は政府軍がやがて撤退することを見込して協力しなかった。したがって尨大な兵力の各個所への駐屯が必要であった。こうして47年春の作戦は挫折する。ギリシア民主軍の兵力は減少するどころか，ますます増大し，イギリス帝国主義とギリシア反革命の敗北は色こくなってくる。

1947年の春，ゲリラ戦の第三段階にはいるころにはギリシア民主軍の兵力は旅団 (700～1300人)，連隊 (200～400)，大隊 (50～100)，小隊 (20～60) および戦斗グループ (10～30) より構成されるにいたる。

6. 内戦 第2期 47年春—48年9月

1946年11月30日，ギリシア政府はその国連代表を通じて，安保理事会に「ギリシア問題」を提訴した。ソ連政府 (46年1月) 及びウクライナ外相 (46年8月) によって提訴された前二回の「ギリシア問題」がギリシア政府がバルカンの平和の脅威となっており，外国軍 (英軍) の即時撤退を要求することだったとすれば，この第3回目の「ギリシア問題」はギリシアにおけるゲリラ運動がユーゴ，アルバニア，ブルガリア三国によって支援されているから調査委員会をもうけよ，という趣旨だった。前二回の提訴は安保理事会によってとりあげられなかったが今回のそれはとりあげられ，万場一致で国連バルカン特別委員会 (UNSCOB) がつくられた。ギリシア政府の提訴を正当だとする1947年5月23日の報告にたいして，ソ連とポーランドは反対の意を明らかにし，「ギリシア問題」は47年6月国連総会へ移された。

こうしてついにアメリカ帝国主義の登場となる。戦災よりの復興にあえぎ，ギリシア内戦の重荷にたえかねたイギリス帝国主義に代って，「反革命の総本山」たるアメリカ帝国主義の公然たる登場である。武装ゲリラを弾圧しギリシアの内戦を早期に終結させるため，4億ドルのギリシア・トルコ援助を約束する，トルーマン・ドクトリンの声明がこれであった。爾来約30億ドルの軍需物資——急降下爆撃機，タンク，野砲，毒ガスとヴァン・フリートを先頭とする大軍事顧問団が続々とギリシアにやってくる。

戦後史の大転換がこうして表面化する。冷戦時代の登場である。これは世界革命勢力の攻勢——第二次大戦中および戦争直後の時期より，ひきつづく直接的革命情勢＝世界革命の第二波 (人民民主主義革命) にたいする反革命の総攻撃の合図となる。

アメリカ帝国主義を先頭とする世界反革命は一定期間内の国際的調停のマヌーヴァー (中国のハレー・マーシャル調停，ベトナムのハノイ，パリ協定に代表される。ギリシアではレバノン協定とヴァルキーザ協定がこれにあたる) ——その本質が革命側の武装解除にあることはいうまでもない——ののち，公然とその牙をむき出す。主な武器

はマーシャル援助と公然たる反革命の軍事力と軍事援助に外ならない。ここにおいて，中欧（フランス，イタリア，ベルギー）諸国の反ファショ大連合政権は互解し，共産党員閣僚は追放され世界労連は分裂し，親米中道政権が樹立されるという形で，戦後「ドルのきずいたアメリカ世界帝国」にくみこまれこれらの国々の人民民主主義革命はその第一段階で切断される。英・米帝国主義の軍隊でなく，ソ連軍の駐屯していた東欧諸国では人民民主主義革命は明確に社会主義革命の特徴を明かにする。アジアでは中国，のちのベトナムにみられるように，革命は武装斗争の再開，内戦という形で新な段階にはいるのである。とまれ，これらの世界的規模での革命と反革命の対決のハシリ，その直接の契機となったのが，ギリシア内戦とトルーマン・ドクトリンの登場に外ならない。

アメリカの全面テコ入れと対応して，ギリシア政府は47年9月7日にはソフリス(Sophulis)政府に再組織される。じりじりと敗北をかさねながらもやがて来るべき反革命側の戦術転換と大攻勢への準備が行なわれる。47年11月には対ゲリラ戦のギリシア・アメリカ合同参謀本部が設置される。

革命側はますますきおいたった。1947年7月にはグラモス山岳地帯から強力なゲリラ軍がエピロスのイオニアの方向へ移動する。都市の攻撃はしなかったが，ザゴロホリア (Zagarouhoria) の広汎な地域に支配圏を広げる。夏期にはたくさんの北方村落や小都市が武装ゲリラに攻撃された。

革命側は敵の戦線が強化され，新な重大な障害が立ちふさがり始めたことに気づかなかった。勢にのったかれらは1947年9月12～15日の中央委員会総会（25人中僅か6人出席）で「党活動の重心を軍事＝政治セクターに移す。こうして民主軍を主として，北部ギリシア地区に自由ギリシアを可能な最短期間にもたらす軍事力とする」という決定をしていたのである。

ゲリラ戦の法則として，守勢—対峙—攻撃の三段階に応じてゲリラ戦—亜通常戦—通常戦という三段階があることはしられているが，かれらは第二段階をとびこえて，いきなり第3の通常戦へ移る決定をしたのである。もとより党内に重大な反対はあった。もともとシァントスは武装ゲリラ斗争の継続に反対していたが，ザハリアディスら多数派政治局員がこれを拒否し，シァントスは47年5月20日急死する。軍事司令官マルコスは第二段階への移行を主張し，第三段階への移行をとくザハリアディスと対立したが，おしきられてしまった。しかしこのマルコス対ザハリアディスの戦術論争は48年～49年にひきつがれ，革命側の敗北の色がこくなるとともに激化してゆく。この総会はさらに「党の全力を動員して民主軍の指導部の戦斗勢力を無制限に支持・拡大する」ことを決定した。全面戦争の開始である。

47年12月24日，臨時民主政府 (PDK) の樹立が宣言された。この第一次臨時民主政府のメンバーはつぎの人々からなっていた。首相兼陸相マルコス・ヴィフィアディス，副首相兼外相，Y・イオアニデス，司法相ミルチァダス・ポルフィロゲニイス (Miltiades Porphyrogennis)，厚生教育相ペトロス・コカリス (Petros Kokkalis)，蔵相ヴァシリス・バルツォタス (Vassils Bartzotas)，農相ディミトリオス・ヴランタス (Dimitrios Vlantas)，国民経済相レオニイダス・ストリンゴス(Leonidas Stringos)，マルコス自身はこの政府樹立を時期尚早と正しくも判断していたのではあるが，やむなくおしきられて首相に就任した。

「潮流が変った」ことはそろそろこの瞬間より前兆された。翌12月25日，アルバニア国境に近いコニツア (Konitsa) という小さな町にたいして，強力なゲリラ軍が攻撃をしかけた。この町こそ臨時民主政府の首都ともくろまれていた場所であった。ギリシア民主軍はこのとき始めてゲリラ戦スタイルでなくよく組織された通常戦兵力として行動した。これに対してギリシア政府軍はコンスタンチン・ベンチリス (Constantine Ventris) 将軍の指揮下に迅速に行動した。ギリシア民主軍が気づいたときには強力な政府軍がコニッツアを包囲していた。1947年12月31日，革命側はさいしょの通常戦に敗北し，民主軍司令部は650人の死傷者をだした上で，撤退を命じた。ゲリラ戦が，第三段階の通常戦に移るには絶対必要な前提となる敵軍隊および国内政治の大規模な解体過程がギリシアではおこっていなかった。逆にアメカリのテコ入れによって反革命の力がしだいに強化され，経験を学びとっていたときだった。これは重大な誤りだった。そしてこれが革命の敗北への道につな

がってくる。

7. 内戦 第3期 1948年10月—49年8月

樹立されたばかりの臨時民主政府はソ連からも，人民民主主義諸国からも期待していた承認をえられなかった。首都コニツア占拠の失敗もさることながら，社会主義陣営内ではもっと「複雑な事態」が進展しつつあったのである。47年8月に計画され，デミトロフによって声明されたユーゴ・ブルガリア間の同盟条約案とバルカン連合結成の動向は，スターリンのげきりんにふれた。48年1月28日の「プラウダ」はデミトロフ声明をきびしく否認していた。2月10日には，デミトロフをはじめ，ブルガリアの共産党幹部とカルデリ，ジラスら，ユーゴの幹部がスターリンによびつけられて，はげしく叱責され，この連邦案は御破産となる。(くわしくはジラス「スターリンとの対話」p. 250～264参照) ついで48年半ばにはチトーらユーゴ共産党幹部とスターリンとの対立，コミンフォルムよりのユーゴの除名事件となる。

民主軍内部でも論争がおこった。通常戦にうつった戦斗を勝利の終結までやりぬこうというザハリアディスとより限定された亜通常戦型の作戦に後退することを主張するマルコスとの間にである。勇み足の極左冒険主義者ザハリアディスにくらべ，チトーに近いといわれたマルコスはより現実主義的な，情勢分析にもとづいていた。かれは1948年半ばに民主軍の弱点を分析して，ゲリラ新兵力の募兵は若いギリシア人の10%以下であること，DSE の募兵は，1947年半ば以降ほとんどもっぱら，強制的な方法によるものであること，王政ファシスト・レジームは相対的安定をえていること，「人民民主主義的勢力は，都市部でも強力な支持をえていないし，都市に攻撃を開始する力をもっていない」ことを明らかにした上でつぎのように結論する。「DSE は近い将来に王政ファシズムを自分自身の武力で打倒することはできない。ただわれわれに友好的な諸国による PDK の承認につづいて，外部よりの直接の軍事援助があるときにだけそれが可能である。しかしそのような可能性は存在していない，何故なら DSE は十分な条件をつくり上げることができなかったし，国際情勢は目下のところこのような措置を許すと思われないからである。」[20]

こうしてマルコスは亜通常戦段階への退却——つまり「小さな機動力のある軽装備の兵力，怠業者，狙撃兵による時と場所を選んだ広汎なゲリラ・タイプの活動——アメリカおよび王政ファシストにたえざる軍事的・経済的出血をしい，政治的不安定を深化させ——さいごにギリシア労働者の悪化する条件を利用して，都市地域の運動を活潑にし，DSE を強化し，そして強力かつ一致した打撃を加えることにある」[21]をといた。

しかしザハリアディスはマルコスの忠告に耳をかたむけようともしなかった。かれはいう「王政ファシストとアメリカ占領者の運命はまったく DSE の軍事行動如何にかかっている。つまり都市における人民蜂起にかかっている」[22]

20) Neos Kosmos Vol. 8, Aug. 1950, p. 476～83, Kousoulas ibid., p. 252.
21) Neos Kosmos Vol 8, Aug. 1950, p. 476～83, Kovsoulas ibid., p. 253.
22) Neos Kosmos Vol 8, Aug. 1950, p. 476～83, Kousoulas ibid., p. 253.

48年春にはじまったこの両者の対立は1948年6月28～29日グラモス地域のペトラ・ボウカ (Petra Bouka) で開れた中央委員会第4回総会で，決着づけられた。書記長ザハリアディスが民主軍総司令官，臨時民主政府首相マルコスをおしきって，意見の相異を忘れて，ザハリアディスの決定に従うように強制したのである。中央委員25人中10人が出席したこの総会は決議する。王政ファシズムのさいごは「すべてのギリシア人が国にたいするその義務をつくすなら，かつてないほど近づいている」と。

ザハリアディスのこの誤った想定は48年夏の政府軍のグラモス攻撃作戦の失敗，その他48年後半の民主軍の若干の作戦の成功によって，実証されたかにみえた。しかしそれはさいごの仇花にしかすぎなかった。潮はすでに流れを変えていたのである。

「王政ファシズムの相対的安定」は，1948年夏および秋には，まったく明らかになっていた。政治的には共産党は孤立化し，他の諸政党はポール王とソフォリス首相のまわりに集っていた。ゲリラ部隊がねらったのと逆のことがおこりつつあった。すなわち，国民とギリシア軍隊の志気が互解

する代りに，高まりつつあったのである。共産党のゲリラが主としてその支持を獲得しようとしたのは農民と都市の低所得層とである。ところが共産党はかれらの支持をかちとることができず，むしろ広汎な分野から支持されたソフォリス政府がそれをかちとっていた。

軍事的には，過去の失敗の経験が総括されしだいに改善されつつあった。早期決戦でなく，「支配の互いちがい Staggered 拡張」作戦が導入された。すなわち，軍隊は組織的にはっきり非ゲリラ地区と区分された地域にその支配を拡大することであり，ゲリラの逆手をとることである。つまり目標地域をえらび，正規軍と特殊反ゲリラ部隊を集結し，連続的攻撃作戦を行ない，その地域のゲリラ軍の探索または捕獲，補助部隊による掃討作戦，地方の静止的自衛隊の建設，掃討地区への永続的政府支配の拡大，ゲリラ部隊のこの地区への再侵入の防止措置，ついで他の地区への移動がこれであった。

1948年4月15日にはこの新戦術のモデルとして，ロウメリが選ばれた。第X，第IX軍団よりの大兵力が中央部に移動させられ，第I軍団に合流した。そして大部隊をもってロウメリ地域を完全に包囲した。そして北，西，東の三方より約2500のゲリラ軍にたいして，特殊部隊による攻撃が行われた。南方の退路であるコリント海峡にはギリシア海軍が四六時中警戒にあたった。そしてこの掃討作戦はゲリラ軍が壊滅するまで徹底的に行なわれた。雪と嵐の気候が装備のよい政府軍に幸した。政府軍はゲリラのまったく逆を行なって，夜間にすばやく行動し昼間は奇襲をかけた。こうして一カ月の追跡ののち，2000人のゲリラが戦死または捕虜となった。この間，村落の地下組織は徹底的に崩壊させられた。このモデル作戦は約三カ月つづき大成功を収めたのである。

こうして政府軍は過去の失敗から学び，新しい方針をうちたてた。それは第一に軍隊の思想的強化である。思想的に政府に忠誠を誓う若者をきびしく選別して募兵し，うたがわしい要素の軍隊への侵入を防ぎ，動揺分子を重要でないポストにつけ，もっとも危険分子はマクロニソス島 (Makronisos) の強制収容所へぶちこんだ。第二にはアメリカの尨大な軍事援助がある。LOK という対ゲリラ戦用の特殊部隊が訓練され，アメリカの急降下爆撃機やタンクが供給された。第三にはアメリカの軍事顧問団(1948年2月以降ヴァン・フリート将軍を先頭とする）と第二次大戦の英雄パパゴス元帥 (Papagos) らギリシア軍幹部との間で，緊密な共同の下にゲリラ掃討プログラムがつくり上げられたことである。このプログラムはつぎのようなものであった。「(a)情報，募兵，供給のためにギリシア共産党が使っていた地下組織を容赦なく根絶する　(b)ゲリラ団を夜となく昼となく絶えず追跡しかれらのキャンプと供給の本部を発見し破壊する。さらにその地域の残りのすべてのゲリラと交戦しこれを一掃する　(c)村落の民兵部隊を組織することによってすでに清討された地区にたいするゲリラ部隊の再侵入を組織的に防止する　(d)共産主義者の根拠地の近くに位置する村落の全住民を移動させる事によって無人地帯を作りあげ，重大な瞬間におけるゲリラに不可欠の情報および食料を奪いとる」[23]

23) Kousoulas; ibid., p. 259.

パパゴス元帥もまたこの点についてつぎのように書いている。「ギリシア軍司令部は1948年にその戦術を変えた。南から北への急速な清討作戦ののち軍隊の主要な努力は共産党員が要塞化していた地域にたいしてむけられ，敵が戦斗を放棄し，重大な損害をともなって近隣諸国へ退却することが望まれていた。」(Papagos ibid., p. 226)

DSE の根拠地は北部国境地帯のグラモス (Gramos) とヴィツイ (Vitsi) の山岳地帯だった。1948年6月初頭グラモスへの第一回の攻撃作戦が開始された。戦斗は40日間続いた。しかし DSE はアルバニアから充分な供給を受け強力な要塞を築きあげていた。ロウメリに駐屯していた第一軍団がついに動員された。攻撃が激化され，48年8月20日グラモスのゲリラの根拠地はすべて占領された。しかし DSE は巧みに攻撃をかわし，アルバニアに退却し，マケドニア北西部のヴィッツイ地域に再侵入してしまった。さらにゲリラは防備の手うすをみこして南方へ進出しカストリア (Kastoria) およびフローリナ (Florina) 近郊へ進出した。こうして8月25日には政府軍はまたまた敗北をきっし，DSE はさらにその支配を拡大したかのようにみえた。マルコスはこの DSE の勝利を

でこにして，王政ファシストとの話しあいを行なうよう提案したが，ザハリアディス一派によって拒否された。さきの亜通常戦へ退却方針とザハリアディスらの通常戦継続方針との論争が再燃し，マルコスは48年11月15日に同趣旨の覚え書を政治局へ提案したのにたいしてフルツサ・ハツィバシリオ (Khryssa Khatzivassiliou) の支持を得たのみでザハリアディスらに退けられた。そしてこの会合以降マルコスは実権を失うにいたる。今やグラモスの勝利に力づけられたザハリアディスはその通常戦略を大々的に行なうのである。

48年11月初旬第十八 DSE 旅団はシアティツア (Siatista) を攻撃し，この町を24時間支配する。11月13日には二つのゲリラ部隊がブルガレリ(Voulgareli) を攻撃する。この時期に DSE はペロポネススで作戦中のゲリラ軍を強化するため1500挺のライフル，100挺の機関銃，1000個の地雷をトルコ軽船にのせて輸送させたが，ギリシア海軍部隊に発見され，沈没させられてしまった。

48年12月11日深夜，強力なゲリラ部隊がカルティツア (Korthitsa) を攻撃し，2日間この町を占領したのち，政府軍第七七旅団に攻撃されてアグラファ (Agrafa) 方向に退却した。12月22日の夜にはカイマクツアラン (Kaimaktsalan) 地域から南方へ移動中の三つのゲリラ旅団がサロニカーフロリナ間の交通の要所，エディサ (Edessa) およびノウアウサ (Naoussa) を攻撃した。エデッサ攻撃は失敗したがフローリナへの侵入は成功し，3日間町に止まった。

DSE はこれに気をよくして49年1月11～12日の深夜三つのゲリラ旅団をノウアッサへ再侵入させ，この町を三日間占領した。かれらはいづれもこれらの作戦行動ののち撤退するさい，沢山の食料を入手し新しい補充兵力を連行していった。

12月にカルティッツアを攻撃したゲリラ部隊はゆっくりと南方に移動し，49年1月5日にはカルペニシオン (Karpenision) 地域に到着した。1月19～20日に3000人以上の兵力をもつこのゲリラ部隊がこの町を攻撃し，1月21日には占拠に成功した。かれらは2月18日までこの町を保っていたが，強力な政府軍部隊にあって，山岳地帯に撤退した。

このような勝利は——実はさいごの仇花だったのだが——，ザハリアディスを勇気づけた。49年1月29～30日に中央委員会第五回総会が開かれ，マルコスは敗北主義のゆえをもって非難され，自宅に軟禁されることになった。ザハリアディスは2月8日に「マルコスは健康上の理由ですべての地位から辞任した」と公表した。この第五総会では，従来強制的に募兵していた予備の問題を解決しようとして討議が重ねられた。ザハリアディスはマケドニア問題にたいする従来の立場を変え，古い見解にかえって「独立マケドニア国家」支持を声明した。かれらはゲリラ隊の敗北後49年10月の第六回総会で再び立場をかえ，「少数民族の同権」を主張するにとどまる。この政策変更によって DSE 支配下の地域に居住していたスロボ・マケドニア人の支持を獲得しようとしたものであったが，この方針転換はまったくの失敗だった。一般のギリシア人の目からはギリシア共産党の祖国にたいする裏切りとうつったしコミンフォルムを追放されていたユーゴの目からはこの措置はブルガリア支持の許すべからざる行動としてうつったからである。(じじつこれを契機としてユーゴは国境閉鎖の措置をとった。セイヤーはかいている。「チトーは1948年スターリンに反抗してクレムリンの支配下から離脱した。そのときかれは，まだゲリラへの支持続行を約束していたが翌年になって事情が急変した。当時モスクワを後楯として，ブルガリアの支配のもとにユーゴスラビアの一部を含む大マケドニア形成の政治的な動きがあったのだ。チトーは明らかにこれに感情を害してまず49年のはじめゲリラへの援助をうらぎり，7月には国境を閉じてしまったのだ」(セイヤー・井坂訳「ゲリラ戦略」弘文堂)

さいごに第五総会はつぎの決議を行なった。「第一に延期することなしに消耗戦を続け，この戦争を大規模な攻撃作戦と狙撃兵のパルチザン攻撃をもって都市部に移行させる……大衆的募兵と DSE の損失の減少によって予備の問題を解決し……強化訓練と政治教育によって DSE の幹部と戦士の質を改善する。第二に，ペロポネスス，ロウメリ，テッサリにおける敵の攻撃を切断し，グラモスとヴィッツイにたいする迫り来る敵の攻撃にたいし血の返答を与え戦略的逆攻勢によって敵を追いかえし，エピルスへの再侵入および解放の

広汎な作戦を行なう」[24] というのであった。

24) Kousoulas; ibid. p. 264.

だが1949年1月には DSE はもはやこのような野心的な計画を実現する力はもっていなかった。1949年1月20日にアレキサンダ・パパゴス元帥が正式にギリシア軍総司令官に任命された。そしてロウメリの実験作戦の勝利に続いて，新しい組織的な総反撃がはじまった。

2月11日に3000人以上のゲリラ部隊がフローリナ (Florina) を攻撃した。捕虜からの情報でこの攻撃を予知していた政府軍はタンクや装甲自動車をもって反撃し，ゲリラ部隊をうち破った。500人のゲリラが殺され，350人が捕虜となり，残りの DSE 部隊はヴィツイ地区に退却した。48年12月にはじめられていたペロポネススにおける作戦が強化され，2000人からなる DSE 部隊は一掃された。

2月2日にカルペニシオンから撤退した第二ゲリラ旅団は，ロウメリの南方に移動しようとしたとき，徹底的な攻撃をうけた。カルペニシオン作戦に参加した第一ゲリラ旅団もまた攻撃をうけた。こうしてゲリラ部隊は絶えず追跡される身となったのである。第二ゲリラ旅団の司令官ディアマンテス (Diamantis) は6月の終りに殺された。この二つの旅団はばらばらになり，空腹と士気沮喪してグラモスとヴィツイの根拠地に帰ってきた。ギリシア各地でゲリラにたいする仮借のない追撃作戦が行なわれた。このような状態の中でギリシア共産党は民衆の支持を集めるため，1949年4月5日臨時民主政府を再組織する。新な顔ぶれはつぎのとおりであった。首相はドミトリオス・パルサリデス (Dimitios Partslides) 副首相はマルコスの辞任後首相代理をつとめていたイオアニス・イオアニデス (Yiannis loaninides)，外相にはペトロス・ロウソス (Petros Rhussos)，陸相にはD・ヴランタス (D. Vlantas)，内相にはV・バルツオタス (V. Bartzotas)，経済相にはレオニィダス・ストリンゴス (Leonidas Stringos)，軍事供給相K・カライオルギス (K. Karayiorgis)，農相にはディミトリオス・パパデミトリオス (Dimitris Papadimitris AKE—新に共産党のつくったギリシア農民党の代表)，共同組合相S・サヴィディス (S. Savidis, AKE)，法相ミルティアデス・ポルフォルジェニス (Miltiades Porphyrogennis)，民族経済相P・アペリデス (P. Avelides—AKE)，保険教育相ドクター，ペトロス・コカリス (Dr. Petros Kokklis)，厚生相 G・ツァパキリス (G. Tsapakidis)，食料相パスカル・ニトロフスキー (Paskal Mitrofski スロボ・マケドニア民族解放戦統一地名代表)，運輸相I・ボウルナス (I. Vournas AKE)，労働相アポロストス・グロゾス (Apostolos Grozos—労働者反ファツショ連合 Frgas 代表)，少数民族次官クラステ・コッシル (Kraste Kotsett —NOF)，1948年春につくられた戦時評議会はつぎの人々によって再組織された。N・ザハリアディス，Y・イオアニデス，V・バルツオタス，D・ヴランタス，G・ジオシアス，またはゲオルギオス・ヴォンティソス，K・カライオルギス，コスタス，コリイイアニス，S・キオウツェリス，G・エリトリアデス，コンスタンチン・ロウリス，ヴァンギェル・コツェフト[25]。

25) Kousoulas; ibid., 266～267.

1949年7月チトーはユーゴ・ギリシア国境を閉鎖した。これによって共産ゲリラのユーゴ侵入とギリシアへの再侵入のために，国境地帯を使うことを不可能となった。武装パルチザンにとって利用できる国境地帯はブルガリアとアルバニアとの地帯だけとなった。これは DSE にとって決定的な打撃であった。

このとき DSE を決定的に壊滅させる政府軍の「たいまつ作戦」が着々と計画されていた。これよりさきユーゴ国境のヴィツイ北東部にあるカイマクツァラン (Kaimaktsalen) 地域のゲリラ部隊にたいして，政府軍は大攻撃をしかけた。この作戦は7月28日には大成功を収め，ユーゴ国境内に逃げたゲリラはそこで逮捕され，武装解除された。これが「タイマツ作戦」の予備作戦になった。政府軍は第一次のグラモス作戦の失敗から十分学んでいた。第二次グラモス作戦は49年8月1日に攻撃を開始するやいなやまずグラモス・ヴィツイ根拠地周辺の村落の農民をことごとく移動させ，ゲリラから情報と供給源を断った。政府軍は爆撃機と野砲隊をつかいながら総攻撃を開始した。そして前回と同様グラモスに攻撃の主力をおくかのようによそおったので DSE はこのトリックにひっかかり，予備軍をグラモスに集結し，ヴィツイを

手うすにしていた。ところが8月10日の夜政府軍は突如として銃砲撃ののち，五師団(第二，九，十，十一および第三師団を) をもつ第二軍団を総動員してヴィツイ山岳の根拠地に迅速な攻撃をしかけた。この攻撃によって DSE は大敗北をうけ，六ゲリラ旅団中わずか一旅団がグラモスに撤退することができたのにすぎなかった。39の野砲，33のタンク砲，16の対空砲，400の機関銃，100人の戦死者が残された。十日後には第一軍団はヴィツイ地区からの増援部隊とともにグラモスのゲリラ部隊と東部および西部から攻撃した。そして激烈な戦斗ののち8月30日政府軍は DSE のさいごの根拠地をおとしいれた。残存ゲリラは国境をこえてアルバニアに逃れた。政府軍の報道によるとヴィッツイの作戦ではゲリラ軍の 997 人が戦死，645 人が捕虜になった，といわれ，またゲリラ部隊の報告ではグラモスとヴィッツイ戦によって1919名が死亡し，1586名が逮捕されたといわれる。ギリシア共産党は49年末これ以上の作戦の終焉を宣言する。こうしてついにギリシアの内戦は武装ゲリラ部隊の敗北をもって終ったのである。この1946～49年の間に，革命勢力の側の死者 1289 人，負傷者6671人，被逮捕者 75000 人といわれ，さらに参謀本部の1949年11月21日付の情報によれば特別軍法会議は5322人の市民に死刑を宣告し，1947年7～10月の間に3038人の刑を執行したといわれる。(前掲；ギリシア内戦の若干の教訓)

8. 内戦の諸教訓

ギリシア共産党は内戦の総括と敗北の教訓をひき出さねばならない。まずチトーその国境閉鎖が敗北の理由としてあげられる。49年9月アルバニアで開かれた中央委員会第6回総会で，ヴァシリュ・バルツオタスはいう。「主としてチトーの裏切りによって DSE は，予備の基本問題と中央・南部ギリシアに兵力を供給する問題を解決することができなかった。DSE は山岳地帯における作戦と並行して王政ファシストが都市においてつくり出した情勢を変化させることができなかった」(Kousoulas; ibid, p. 272)

ザハリアディス自身も50年5月14日の第7回総会で「若し1946年からプロバカートルたるチトーの不誠実な役割がわれわれに分かっていたならば，当時ギリシア共産党は再び武器をとれとの決定に達しなかったであろう。

党は他の道，もっと決意に満ち，もっと苦難に満ち，もっと長い道を歩んだであろう。何故なら，王党＝ファシズムが米・英の十分な支援を得ている時，確かな後陣なくして新らしい武装斗争につき進むことは不可能であったろうことは極めて明瞭であるから」[26] といっている。しかしチトーとの対立とユーゴ国境の閉鎖は敗因の重要なものの一つであってもすべてではない。

26) ザハリアディス「ギリシア共産党の活動について『世界情勢の新しい段階と各国共産党当面の任務』社会経済調査所，p. 236.

同様に英・米とくにアメリカの強力な援助もまた敗因の一つにあげられる。ザハリアディスは，50年夏にこう書いている。「われわれはわが国における内戦がたえず，もっぱら外部から供給を受けるが故に継続しているという点について争おうとは思わない。米英帝国主義者がギリシア王政に供給してくる数千トンの戦時資材と数10億ドルが1カ月でも止まれば，王政ファシズムは一掃されることを全世界がしっている。」[27]

米軍顧問団長のヴァン・フリート将軍自身，ワシントンでの新聞記者会見で「もしわれわれが現在，ギリシアより撤退すれば何がおこるか」という質問にたいし，「われわれはギリシアを失うだろう」と答えている。」[28]

27) Olive Sutton; The Struggle for Peace, Liberty and Bread in Greece, Political Affairs. Nov. 1949.
28) The New York Times. June 24, 1949. Sutton ibid.

もちろんこのアメリカ帝国主義の援助もまた，ギリシア・ゲリラ敗北の大きな要因であったろう。しかしそれがすべてではない。ギリシアを上まわる60億ドルという援助にもかかわらず革命の勝利した中国の例がある。問題はゲリラ斗争内部にもあった。

大衆から孤立し，予備の問題を解決しえず，主として新兵力の募兵が強制という方法にたよらざるをえなかったこと，都市部での主として労働者階級よりなる政治的攻勢が農村のゲリラ斗争と相応して展開されなかったことも，大きな理由の一つだろう。また戦術的に49年の「たいまつ作戦」のさいに中央ギリシアでゲリラが大攻勢を行ない

ギリシア政府軍をひきつけ，北部の斗いを支持することができなかったことも敗因の一つであろう。内戦開始の時期をあやまったことも，またさきにくわしくのべたようにマルコスの忠告をさけ，力関係が不利に展開したときに，いきなりゲリラ戦より通常戦へ移ったことも，その大きな敗因をなしたといえる。しかしここからギリシア革命が一般にゲリラ斗争の形態をとるべきでなかった。「武器をとるべきでなかった」と結論しうるであろうか。わたくしはこの見解に組しない。問題は力関係の評価，時期の選定の誤りにあったと思われる。

イタリア共産党のトリアッテイはいう。「社会主義の方向に前進するために議会を利用することについてもまた，われわれはなにごとかをなしてきたとわたしはおもう。たとえば，つぎのような事実のまえに目をふさぐことはできない。つまり，今日われわれは，欲するといなとにかかわらず社会主義の刻印をおされたいくつかの基本的改革が規定されている憲法をもっているが，このことは，1947年に共産党員が，権力奪取の一か八かの試みのために法秩序を破壊する道を拒否し，反対に憲法制定議会の討議に参加する道をえらんだ事実による。こうして，社会党員および社会民主主義者と共産党員との特定の意見の一致だけでなく，カトリック・グループの一部——しかもわたしの考えではその多数——と共産党員との特定の意見の一致をもとおして，諸君が知っているいくつかの新しい原則を憲法に導入することができたのである。このことは偉大な成果であった。

これらの条件のもとではこのように行動する必要のあったことを，理解できなかった諸党がほかにはあった。たとえば，ギリシアの党の同志たちはこのことを理解できなかった。というのは，1945年に選挙がおこなわれるという布告がだされたとき，かれらはそんな選挙は芝居にすぎないというだけで事たれりとして，党にとっても一般にギリシア人民にとってもあとに不利な結果をのこすこととなった内乱に，火をつけるような立場をとったからである。われわれの方針は異なっていた。そして，経験はわれわれが正しかったことを証明した。」（「社会主義・民主主義」トリアッティ論文集～イタリア政治研究会編，合同出版社）

しかしここでも社会主義への（先進国）イタリアの道とヨーロッパにおける後進国たるギリシアの道とは非常に大きな相違のあることを注目せねばならないし，ギリシアは議会と合法性の利用の下に有利な条件を成熟させたとしても，イタリアとちがってさいご的には「批判の武器」が「武器の批判」にかわったであろう。

ギリシア共産党の敗北後も，ザハリアディスの極左冒険主義的傾向はなおつづけられ，異論をとなえるパルツァリデス，イオアンデス，カライオルギスらを追放することでスターリン主義的「一枚岩的指導」を保ちつづけたが，スターリンの死とソ連共産党20回党大会後，1956年2月の第6回中央委員会総会ではじめて，ザハリアディス，バルツォタス，ヴランタスらの個人崇拝に終止符をうつことになった。57年10月の第7回総会で今度はザハリアディスらが除名され，また6月10月の第8回大会でアポストロス・グロゾスを議長としコスタス・コリヤンスを第一書記，ディミトリオス・パルツァデス，レオニタス・ストリンゴス，パナイオティス・マヴロマティス，Z・ザグラフオス，ディミトリオらによって構成され新政治局がつくられた。そしてこの第8回大会で民族民主主義革命（反帝民主主義革命）と平和移行を内容とする新綱領が採択された。すなわち「わが党は，ギリシア人民の平和な民主的発展へのふかい志向，その他一連の要因——そのうちのもっとも重要なのは，他国の内政にたいする帝国主義者の干渉を困難にしている世界の社会主義に有利な力関係の根本的変化である——を考慮にいれて，綱領のなかで，一定の条件のもとで民族民主主義的変革を，ついで社会主義的変革を平和的な方法で，武装斗争をへずに実現する可能性がギリシアにはあると宣言した。」[29]

新しい戦術転換とともに非合法の共産党は「上からと下からの統一戦線」の戦術の下に合法政治グループ統一民主左翼（EDA）を形成し，議会選挙を斗う。しかし50年代にはパパゴスの（ヘレニック同盟）とその後身カラマリニコスの急進社会党（ERE）の政治的独占体制はゆるがぬかにみえた。EDA は51年選挙では250議席に10，52年は0というに足る勢力を結集できなかったが，56年2月にはさらに民主同盟を結成し得票48・15%，

132議席（うち18人が EDA）という大成功をかちとる。さらに58年5月には EDA は24.4%，79議席，といっためざましい進出ぶりをみせ，合法活動に専念するにいたった。

29)「ギリシア内戦の若干の教訓」『平和と社会主義の諸問題』日本版，1964.11，p. 31.

1964年「ギリシア内戦の若干の教訓」（平和と社会主義の諸問題，1964年11月号）は内戦の総括と教訓をつぎのように指摘している。それは内戦開始前の中間期の18カ月を無駄にしたことを基本的誤りとしつぎのようにのべている，少し長いが引用しておこう。「ここで云っておかなければならないのは，占領期にギリシア共産党指導部によっておかされた右翼日和見主義的誤りが，1944年12月のイギリスの公然たる武力干渉に抵抗する思想的，政治的，組織的準備を人民運動にととのえさせなかったという結果をもたらしたとすれば，1944年12月以後の左翼日和見主義的誤りは，ギリシアの内戦——反動派と帝国主義者はこのなかに12月の打撃を仕上げ，民主主義運動を破壊し，自己の権力をかためる可能性だけをみた——にかれらが火をつけるのをたすけた，ということである。

わが党の第八回大会（1961年8月）の評価によると，この時期にギリシア共産党指導部がおかしたおもな誤りはつぎの諸点にあった。第一に，党指導部は戦後（1945～46年）の情勢をただしく評価することができず，労働者階級のまわりに大多数の人民を団結させるのをたすける平和的な斗争形態を軽視し，必要な前提条件がないのに武装斗争にうったえた。第二に，ギリシア共産党指導部は，武力にうったえることを決定して，武装斗争の準備のために貴重な多くの時間をうしない，それを敵に利用された。これらの主要な誤りや，また当時の党指導部の初歩的なまた一般に左翼セクト主義的な政策からくるその他の一連の誤りの結果，人民民主主義運動に重大な結果がもたらされた。……

ギリシア共産党指導部がとったこのような方針の直接の結果は，広範な大衆からの党の遊離と孤立であった。……

わが党第八回大会は，党指導部が党を武装斗争にむかわせ，その準備におもな力を集中させないで，事実上18カ月を無駄にしたことも基本的な誤りとしてみとめた。

ここでとくに強調しなければならないのは，第一にこの時期の党指導部の政策には，あきらかな矛盾と動揺がみられたことである。その点で特徴的なのは，1946年4月16～17日におこなわれた全国組織会議の内容である。会議はギリシア共産党中央委員会二月総会が，それまでのわずか2カ月間指導してきた武装斗争とはなんの共通点もない課題を党員に提起した。農村党組織を解散し，農村党員をギリシア農民同盟にうつすという第七回大会（1945年10月）の決定の実践はその当時にはじまっている。党組織（農村の組織もふくめて）の全面的強化の必要がおこり，指導部の指示にしたがって武装斗争がまさに農村で開始されなければならなかったし，事実上すでにそれがはじまっていたそのときに，農村の党勢力は実質的に解体されつつあった。第二に革命斗争の戦略の重要な部分である予備軍を確保する問題の解決のしかたが誤っていた。

いうまでもなく，武装斗争勢力と予備軍の確保はつぎの諸点にかかっている。(1) ただしい政策，(2) 武装斗争勢力，まず第一に党勢力を政治的・思想的・組織的に育成する計画を適時に作成すること，(3) 人民運動から予備軍を奪いとろうとする敵のこころみを，機を失せず断固撃退すること。そのさい予備軍を組織し，動員するうえでも敵をうわまわることが必要である。

さきにのべたことからわかるように，第一の条件は確保されていなかった。武装斗争の決定は大衆の希望と気分に反していた。積極分子や党員のおおくもそれに同意しなかった。これからわかることは，第二の条件を確保すること，すなわち，武装斗争勢力の思想的・政治的・組織的育成は，はかりしれないほど困難な課題であったということである。党の武装斗争の決定はなによりもまず積極分子と党員の財産になることが必要であり，かれらの不屈の活動と革命的な情熱，エネルギーがあってはじめて，広範な大衆のなかに高揚がおこり，武装斗争の決定がこれら大衆の財産になるのである。

レーニンはこう指摘している。『大衆は，自分たちが，血なまぐさい，決死の武装斗争にむかってすすんでいることを知らなければならない。死

をものともしない意気ごみが大衆のなかにひろまって，勝利を確保するのでなければならない』(「モスクワ蜂起の教訓」邦訳，全集第11巻，p.167)

農村のパルチザン戦争の形態をとるものであっても，武装斗争の開始はおそかれはやかれ，党と全民主団体の合法的機能の廃止をまねかざるをえない。したがって，地下活動の条件のもとで党組織の生命と活動を保障する措置をととのえ，実施しなければならない。このことは，なによりもまず，敵に支配されていて，しかも革命の全前衛勢力—労働者階級の大部分がくらしている中心的都市についていえる。

こうした措置がとられなかった結果，党とギリシア民主軍を人民から孤立させようとした敵の努力は断固たる抵抗をうけなかった。……

第三に，軍隊の問題にたいする正しい取扱いがなかった。武装斗争がどんな形態をとるものであれ，軍隊は人民の蜂起を勝利させ，あるいは敗北にみちびくうえで決定的な役割をはたしうるものである。ヴェ・イ・レーニンはこう指摘している。『実際には，真に人民的な運動のさいにはつねに不可避的に生じる，軍隊の動揺は，革命斗争がはげしくなるにつれて，軍隊の獲得をめざす真の斗争をひきおこす。モスクワ蜂起は，軍隊を獲得しようとする反動派と革命とのまさに死にものぐるいの，このうえなくはげしい斗争を，われわれにしめしている』(同上，邦訳 p. 162)。

ギリシア共産党指導部が武装斗争を決定した時期の軍隊の状況の把握とこの問題にたいする指導部の態度から，その後，軍隊の獲得をめざす斗争のこのレーニン主義的原則が，武装蜂起を準備し遂行するさいに無視された，と結論することができる。……長期にわたって武装斗争を指導する軍事機関がなかったこととならんで，戦略計画がなかったことも指摘しなければならない。地方の党組織は，ながいあいだ明確な方向をもたず，自分の判断で武装斗争を発展させるさまざまな措置をとりながら，指示をまっていた。1946年の春以降にうまれた武装部隊は勢力をのばさなければならなかったのに，独自に判断してこれを整理した。たとえば1947年におおくの武装部隊は，人民志願兵を採用せず，逮捕がまちうけている農村にかれらを帰さなければならなかった。

戦略計画の欠如は，その他の否定的現象とともに組織と作戦指導の過程に反映し，敵とその力量，軍事行動のこんごの発展の見とおしの研究をさまたげる結果になった。」[30]

30) ジシス・ゾグラフォス「ギリシア内戦の若干の教訓」『平和と社会主義の諸問題』日本版，1964年11月号 p. 22～26.

はじめに右翼的誤り，ついで左翼的誤りのためにギリシア革命は挫折した。マルクス主義の古典家が厳重にいましめた武装蜂起をもてあそんだ結果は，おびただしい血の犠牲と王政ファシズムの強化と人民の困窮ということであった。このためギリシア革命だけでなく，ヨーロッパの革命もまた停頓した。そしてギリシアの困難な情勢はいまなお続いている[31]。

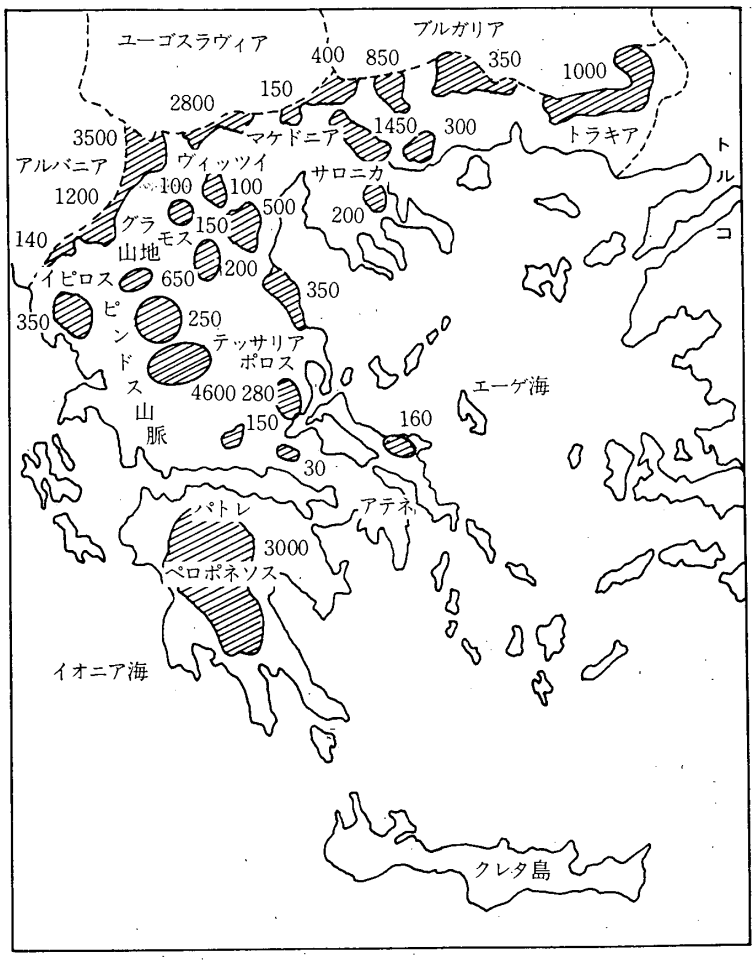
爾来帝国主義は自信を回復しマレー・フィリッピンのゲリラをたたきつぶし，遂に50年6月の朝鮮戦争にふみきるのである。ギリシアの愛国者の心臓の血をもって書かれたつぎの叫びに革命ギリシアがこたえるのは何時の日であろうか。「自由の日がきたときに，歓喜と勝利の鐘がなりひびいたときに，お母さん，あなたはいわれるでしょう。『あれは私の子供だ，私のヤニスだ。あの鐘をならしているのは』と。夜はあけようとしています。まもなく暁がおとずれます。風は自由をつげるのに，嵐はますます荒狂っています。しかしいかなる嵐がこようとも，お母さん，私はしりごみしません。そしてもしも私が自由のために死ぬ運命だとするならば，それはすばらしい死でしょう……。高遠な理想に奉仕するためにその生命を捧げたものは，決して死なない。いかに生くべきかを知っているものは，またいかに死すべきかをも知っています……。われわれのうしろに，倒れた戦士のうしろに，他のものをつづかせよ。」(ヤニス・ツイツィノリスの，処刑直前の手紙文書『心臓の血をもって』より)

31) 1960年代になると政治の季節が変ってきた。人口の50%を示す農民と都市の下層のあいだの不満が高まってきた。パパンドレウの中央同盟が地盤をかため，1964年選挙では勝利を収めて，与党 ERE に代って内閣を組閣するにいたる。広汎な農民層と労働者，都市小ブルの同盟がこれを支持する。ギリシア内外の大ブルジョアジーは非常な危険をみてとって，65年に王党派のクーデターを企てさせる（アスビダ事件）しかしこれは，未然に発覚し，中央同盟のさ

らに一層の急進化をもたらす。この危機を予防するため68年4月2日に大佐派の軍事クーデターが行われ権力をにぎって，専制の警察国家を樹立する。こうして3回目の危機（戦時中と12月事件を第1回目，46〜49年の内戦を第2回目とすると）はこうして大佐派軍人のクーデターによって予防されたのである。

しかし68年11月パパンドレウの葬式を契機に30万人大デモがおこなわれたように深部では民衆の急進化がすすんでいる。ギリシア共産党もこのクーデターによる政治的進出の挫折の結果，分裂する。67年始めにはコリヤデスと他の政治局との間に対立が生れたが，今度はバルツァリデス，デミトリウ，ソグラフォスら統一中央委員会派とパルツァディス派とに分裂する。統一中央委員会は「22名の在獄党員の訴え」の結果解消し，国外党指導部にたいする国内党指導部の優位が確立した。

(Constantine Tsoucalas; Class Struggle and Dictatorship in Greece, New Left Review 1969, No. 56, イリオス・ヤナカリス「ギリシア共産党」NLR, 1969, No. 54)



ギリシア　エラスの支配地域。1949年1月現在。

▒　エラスの支配地域。数字は兵員概数を示す。

エラスの総兵力は 23,210

0　50　100 マイル

アーサー・キヤンベル
沢　不　　静　訳「ゲリラ」166ページ。